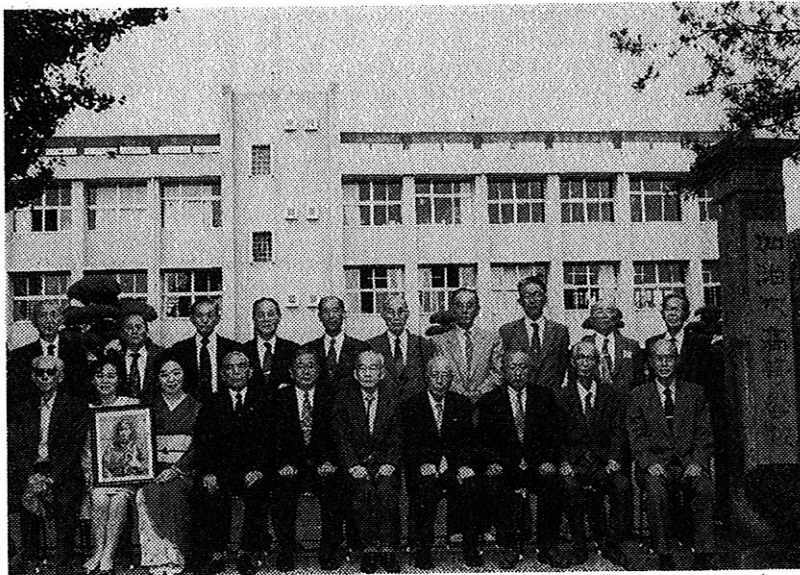


東京龍門会報

発行所
 東京都品川区東五反田
 2-21-20
 今村電機株式会社内
 電話 03(5449)0521
 東京龍門会
 発行人
 今 村 彬

平成7年度の
 総会は5月13日(土)
 会場は三州クラブです



80才を迎えた「昭7会」の面々(2頁参照)

寄 窓
 同窓相會正門前
 一別来来六十年
 蕭殺秋風吹白鬢
 老樟如旧綠新鮮

東京龍門会總會のご案内

平成7年度

陽春の候 益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。
 平成7年度の東京龍門会總會を、左記の通り開催することになりました。

加治木高等学校校長並びに柚木同窓会々長をお迎えし、皆様と親しく懇談いたしたいと存じますので、多数のご参加をお待ち申しあげます。

なお準備の都合上 五月九日 までに同封のハガキにて必ずご回答くださいますようお願いいたします。

記

日 時 平成7年5月13日(土)

午後2時から自由懇談会

午後2時30分から總會

午後3時30分からパーティ

場 所 三州俱樂部(品川区上大崎1-20-27)

電話 03(三四四七)六七七六

JR目黒駅下車、目黒通りを白金迎賓館の方へ約200米進み、高速道路の交差点を右折し、3本目の通りを左折、突当りです。
 (徒歩約10分)

会 費 パーティ費 男 子 六千円

女 子 五千円

年会費 二千元

平成七年四月吉日

東京龍門会々長

今 村 彬

TEL 03(五四四九)〇五二二

◎住所・職業その他に異動がありましたら、ご面倒でも同封のハガキでご通知ください。

平成6年度の東京龍門会の総会が昨年の5月28日(土)に、三州クラブで開催された。会場には老若男女約150名の同窓生が参加し、郷里から登山浩一校長と柚木一雄同窓会長が列席された。校長より学校の近況報告が、同窓会長からは母校創立100周年を迎えるに当り本部の事業計画等についての説明があった。議事の審議は平成5年度の事業経過と会計報告が、続いて平成6年度の事業と予算案の説明があり、満場一致で承認された。パーティーに移り和気藹藹で盃を交わしあった。

総会への参加を お待ちしております

東京龍門会々長 今村 彬
(高2回)

今年は少し景気に明るさが射してくるか、と思っている矢先、去る一月十七日の早朝に阪神大震災が起こり、経済に及ぼす影響はもとより、阪神地区に在住の同窓生の方々にも多数被害に遭われた、とお聞きしておりますが、被災者の皆様の一日も早い復興を心からお祈り申しあげます。皆さんもご承知のように、東京龍門会総会の場合などで大変お世話になりました村山喜一先生が政界を引退され、衆議院副議長をも辞退されましたので、郷里の有志により昨年の5月17日に「村山先生オヤットサー会」を開催しましたところ、東京龍門会、蒲生会、村山喜一後援会並びに先生の友人の方々多数の参加を

頂きました。参加者の中には土井たか子衆議院議長、現在の村山富市総理大臣並びに前羽田孜総理大臣や、この度の阪神大震災において地震対策担当大臣として活躍中の小里貞利先生ほか、政界の中枢で活躍中の議員の方々が参加され、各氏の挨拶の中で村山喜一先生がかつて国政の場での活躍と、そのお人柄をあらためて知らされました。さて平成7年度の総会は、表記のご案内の通り、三州クラブにて5月13日に開催しますので、同期のお友達とも声を掛け合い、多数ご参加くださるよう、心からお待ちしております。

追憶

立山清治 (昭7中卒)

中国の陽関跡に立つて

旧制中学五年卒業直前、漢文の授業に中国盛唐の詩人王維の作

「元二の安西に使いを送る」という題の七言絶句の漢詩があった。解釈が終わってから、先生に吟じてもらおうと皆で要望した。間もなく卒業していく私達に、あの謹厳な入部亀治先生は顔に一寸笑いを浮かべられて、名調子というか、音吐朗朗と吟じて頂いた。私はとても感動してしまいその後この詩を暗誦し、就職後も職場の宴会や送別会等で吟ずる機会が多かった。入部先生に指導を受けた当時の漢文読本(巻五)が現在でも私の机上にある。その読本の頁を捲くると次の通りである。

送元二使安西 王維
渭城朝雨浥輕塵 渭城朝雨 輕塵を浥す
客舍青青柳色新 客舍青青 柳色新なり

勸君更盡一杯酒 君に勸玉更に尽くせ一杯の酒
西出陽關無故人 西のかた陽関を出ずれば故人無からん

右の詩を吟じてからやがて就職後30余年の歳月は流れて、そして退職第二の人生も20余年が過ぎてしまった。いよいよ無職である。毎日家にいてぶらぶらしているのか。ボケ防止をどうするか。種々考え良い方策を探し歩いた。その結果、湯島聖堂の斯文会で実施している講座の中に「唐詩の鑑賞」「漢詩文等吟詠」があるのが判明したので、早速入会して約10年余続いている。この講座で前記の王維の詩があり、氣持を新たに

吟詠に精を出してきた。指導の先生の説によれば、後世の音楽家が王維の詩をもとに作曲した陽関三疊という朗詠の方法が発表されたから、一層有名になり陽関に親しみを一般に覚えさせたという。私はたまたま聖堂朗詠会の第四次総路訪中団に参加することができ、平成2年8月下旬9月上旬に、安西のさらに西にある敦煌を基点にして、この周辺の玉門関・陽関烽火台など古代関所跡を訪ねた。関所跡に立つて訪中団一同で、王維の送別の詩を沙漠の果てまでも響けとばかり高吟した。中学卒業の直前に習い引き続き長い間職場等で吟じ、更に聖堂朗詠会で指導を受けてきた詩の一つである。母校から東京へ、成田から北京へ、北京から西安へ飛び、あの渭城(咸陽の別名、秦の首都咸陽を漢代には渭城と呼んだ)の街を見て、更に西安から西にある安西(唐代安西都護府が置かれた地)へ、安西から更に西南の陽関の関所跡にと遙か遠い地にやって来て、そして沙漠の真ん中に立つて同一の詩を吟じ得た。一種不思議な感慨に浸ることができたと思負している。

望郷の漢詩

人生は80才代に入ったという。その基はと云えば健康が第一であると思う。私のように故里から遠く離れた都会に住み老いていると一層その感を深くし、そして郷愁を覚えてくる。昭七会(昭和七年旧中卒業の同期生会)の現況報告によれば同会への出席数も激減し、

会の維持なども不安な状況になってきたとのこと。従って傘寿のよき年を契機に、人生八十年を生きてきた「記念文集」を作ることにした。この文集には、拙なながらも思い出の一つ二つを記すことにした。あの郷里の真夏の頃マクワウリ等を食べたり、加治木「まんじゅう」や「つけあげ」などを食べたりした数々の思い出が去来する。久しく離れている同期生に望郷の漢詩を寄せたい。

寄中同学窓
同窓一別幾春秋 同窓一別して幾春秋
我老都塵奈客愁 我は都塵に老いて客愁を奈せん
身健猶欣年八十 身は健にして猶欣ぶ年八十

帰心日夜憶桜洲 帰心日夜憶桜洲を憶う
最後の同期生会
昭七会の最後になるという総会を平成6年10月16日に開くからと帰郷を促す連絡を受ける。是非郷里に帰り総会に参加することにした。10月15日に羽田を出発して、同16日の午前中は立山藤男君と小生の妻と、甥の吉野富夫君(昭22中卒)の運転する車で帖佐を出発し、先ず龍門司焼の窯元を見学、その後で龍門の滝を眺望した。滝から綱掛川へと流れゆく川の辺に立ってしばしば見惚れ、この辺りの川に散在していた玉石を拾い集めて、母校に運搬した懐かしい思い出の場所である。中学二年の体育時間になるとこの川の辺りに皆でや

つて来て、拾い集めた玉石がプールの建設に、またスタンドの工事用の敷石となった事を追憶した。

雄大な滝の景観を久しぶりに眺めてから母校の正門に入り、海音寺潮五郎先輩の文学碑や諸先輩達の作になる「若人の像」その他を観てから、校庭を一望しスタンドに佇立する。スタンドのコンクリートの中に詰められている玉石の事を懐しく思い、顔を挙げれば老樟が緑豊かに日に映えて、中学生当時に見た頃と変わらずに良く茂っていると感じた。やがて集合時間が迫ってきたので校長室に豎山浩一校長を訪ねた。というのは龍門滝を眺める小高い丘に、観音石像が建っている。その背面に彫刻されている七言絶句の漢詩をコピーしてもらおうとお伺いした。後の総会の席場でこれを皆に配布した。

この観音石像の建立と漢詩の作者は島津久徴公であると伝えられている(詳細は母校創立90周年記念誌。樟蔭'96'97頁参照)。総会に入る前に校門で記念写真を撮り会場へと集合、この日の感慨を左の七言絶句に作り、会場で吟詠した。

寄一同窓

同窓相會す正門 同窓相會す正門

一別来六十年 一別来(以来)六十年

蕭殺秋風吹白鬢 蕭殺たる秋風は白鬢を吹き

老樟如旧緑新鮮 老樟旧の如く緑新鮮たり



同期会より

高11回卒

35周年記念同期会

幹事 朝倉正昭
中野史子

昨年の8月21日東京の帝国ホテルで加高11回卒業生の、35周年記念同期会を開催した。北は北海道から南は鹿児島までの男子36名、女子29名の同期生が参集した。恩師の上原先生、伊地知先生をはじめ母校の豎山校長、東京龍門会の今村会長にもご参加いただき大盛況であった。懐しい面々との旧交を暖めたのは勿論のこと、恩師のお二人も大変お元気で、35年前の頃と同様「カライモ普通語」で想い出話に、一人ひとりに対応されていた。校長先生からは母校創立百周年記念事業や学校の様子などお聞きし、躍進する母校の姿に想いを馳せ、今村会長からは過分なる祝辞と激励を頂いた。会はなごり尽きず二次会へと「午前さま」の時間となってや々と散会、翌日は有志による箱根観光バス旅行も実施され、想い出多い同期会となった事と思う。平成11年は40周年に当り、鹿児島で開催することになり、より親睦交流の輪を広げるべく思案しているところである。今回の会には東京地区の皆さんはじめ多くの方々のご協力ご支援を、また不参加の36名の方からも協力金なるご支援を頂くなど、幹事として深甚に感謝し、北から南から

参加者代表の感想文をお届けします。

北海道在住 竹内 美保

札幌の住人になって18年、こんな北国に住んでいると同窓会など人の話としてしか受け止められないうでいた。「同窓生ってなんて素晴らしい存在だったのだろう」これが私が出席しての大きな感動となっている。待ちに待った35周年の同窓会にいささかの緊張と不安を抱きながら出席したものだ。初めのうちこそ堅苦しい挨拶を交わしていたのが、「ネー 史ちゃん！」等と呼びかけた瞬間から昔の高校生にタイムスリップしてしまう。35年ぶりに会う人、5年ぶりの人、それぞれに想いは交錯して懐かしさだけが広がってゆく。上原先生の翔んでる話、伊地知先生の変らぬ朴訥な語り口、お互い年をとった事も忘れてあの頃にゆっくり戻っていく。多感だった高校時代を共に過ごして来たという共通点のみで、なぜこんなにも懐かしく思えるのか。「あの大樟が……」と話しただけで、みんな遠くを眺める目で同じ物を見ている。残された人生は同窓生と可能な限り集いたい一方、私は訪ねてくれる友を北国で待っている。

埼玉県在住 満田 泰啓

30周年記念同窓会に参加したのはついこの前の様な気がする。懐しい面々、感激した想い出、新たな交流の再開、その時五年後の東京開催が約された。東京から参加した朝倉君、満田君がこの話を持

ち帰。細々と続いていた「在京同窓生有志の会」と、女性群が行なっていた「食事会」をドッキングし、これを母体に同窓会の輪を広げることから始めた。年々女性の参加も増え35周年へ向けてのムードも盛りあがっていった。具体的企画作りをし、平成6年の新年会で合意を得、幹事を決め度重なる幹事会で検討を進めた。最終的には実行委員会代表幹事朝倉君と中野さんを中心に、各実行委員の努力により記念すべき同窓会は大成功裡に終了できたと思う。長年世話役を務めた一人として、喜んでくれた参加者面々と至福の時を共有できた事と、暖かい交流の輪の広がりに心より感謝し、40周年同窓会での再会と益々のご自愛を祈念します。

鹿児島県在住 馬場 健治

加高11期生の同窓会は昭和54年8月に発足、その後毎年新年会、忘年会を開き、平成2年には卒業30周年記念同窓会を開催し、百名近い参加で盛会裡に終了できた。今回の35周年記念は東京地区主催で開催され、恩師の御出席も頂き先生方の卓話に感激した。お二人共酒量衰えることなく二次会も最後迄お付き合い頂いた。35年ぶりに会った山元、別府、児島君ら懐しい限りで、小生にとっては少々喋り足りぬ、食い足りぬままの解散の印象が残る、いつも思うことにどうして今迄もつと頻繁に会わなかったのだろうかという後悔に似た気持があったが、翌日の箱根バ



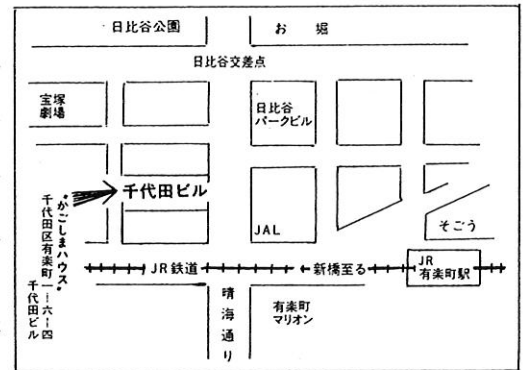
第20回

関東鹿児島県人会連合会に参加して

関東地区一円に在住されている鹿児島県出身者の親睦と絆を深めるために、昭和49年に設立された関東鹿児島県人会連合会の「20周年記念大会」が、去る2月25日(土)に東京宝塚劇場にて開催された。約2600名の方々が参加しておられ、毎年一回開催されているそうだから、東京龍門会員の中にも参加されたことのある方が多いかと思う。関東県人会は市町村単位の会107団体と、学校別同窓会102団体や、例えば埼玉鹿児島県人会といった居住地別県人会36団体、それに職域別県人会27団体などから組織された県人連合会である。

二階堂進氏(衆議院議員、肝属郡高山町出身)を名誉会長に、曾山克巳氏(㈱エフ・エム・ジャパン相談役、鹿児島市出身)が会長で、役員145名からなり、関東県人会の運営に当たられているのである。東京龍門会もその傘下にあつて、役員に名誉顧問として国分和夫氏(大14中卒)、中馬辰猪氏(昭8中卒)、小里貞利氏(昭23中卒)が、そして運営委員として副幹事長に岸園司氏(昭25高卒)、財務委員長に今村彬氏(昭25高卒)、企画委員長に山元貞明氏(昭32高卒)、ふるさと交流委員に藤島義行氏(昭37高卒)らがそれぞれ協力されておられる。大会には来賓として郷里の方から、土屋佳照鹿児島県知事や赤崎

義則鹿児島市長、ほかに数名の名士の方が参列されていた。土屋県知事の挨拶によると「屋久島」が世界の自然遺産として登録されたことや、霧島地区に霧島国際音楽ホール「みやまコンサート」がオープンしたことなど、そして今や農・工・水産業の各分野にわたり「南のキラメク躍動の鹿児島」に向けて、総合的構想を着実に推進しつつあり、また一方「新しい鹿児島の創造」を目指して、東京のと真ん中、JR有楽町駅に近い所にある千代田ビル内に「かごしまハウス」(仮称)を設置し(略図参照)、新しい名所づくりを計画中だとか、今年の5月頃には完成するのでそうである。新設されるこの「かごしまハウス」を情報の受信・発信の総合的な拠点として、ハウス内には県の特産品、工芸品などの展示及び即売のコーナーや観光コーナ―を、また「人」と「食」のふれあいを求め、県内産の素材を存分に生かしたレストランの開設など、鹿児島島の文化に少しでも多くの方々に触れて頂くという狙いなのだそうである。それぞれの方の挨拶が終り、20周年記念に際して、優良従業員の表彰並びに役員への感謝状の贈呈式が行なわれた。式に当りそのアシスタントとして、95年ミス鹿児島島の清水秀美嬢と佐藤子嬢が紹介



され、会場に二輪の綺麗な花が添えられたよう一段と明るくなった。二人は鹿児島市内の出身で鹿大に在学中とか、加治木高校の女子OBにも教養ある閉月羞花といったお嬢さんが、ズバツおられたらうにノサンコツでした。

第二部は「屋久島の自然を守る集い」があり、屋久島の自然保護や環境保全などに役立ててもらうために、かねて全国の皆さんから寄せられていた募金を、(財)屋久島環境文化財団(会長 土屋県知事)に基金として贈呈された。屋久島の奥に潜んだ自然の美しさと神秘性にふさわしく、そして屋久島に今いろいろな環境文化村の建設構想が進行中である事など、改めて認識させられた。余興に入り鹿児島県出身で若手落語家の、三遊亭歌之輔さんと林家種平さん、ほかに2名の方の出演があり「屋久島と

その心は、珍しい生きものが沢山いる」といった塩梅のなぞかけ問答や、鹿児島県のレストランで外人さんがビヤ、ビヤと云って人さし指を立てたので、女店員さんさっそく、ビヤ(枇杷)を一個テーブルに運んだそう、その外人さん目を白黒させオー・ノー・ノー・ビヤビヤ(ビール)と云うばかり、「ビヤ」と云えば鹿児島弁で果物の枇杷(ビワ)のこと、また「へ(灰)がフツク」「へ(蠅)がウケナ」「へ(屁)をヒツタ」など、「へ」一つの発音で三つの言葉の意味に通用するといったような、鹿児島弁ならではの漫談を面白可笑しく、会場はアツハハハハ：ならぬ、へへへ：の大爆笑であった。

第三部は、昭和58年にテレビドラマで放映され、日本中に社会的に大きな話題を呼び、今では海外でも評判になっているという「おしん」の観劇の集いに移った。当時子役の名演技で一躍ヒーローになった小林綾子さんもすっかり大人になられ、劇では子役は別の役者さんだったが、小林さんは青春期に入ったおしんに扮し、風雪に耐えながらも、力強く生き抜いていき、やがて髪結いとしてりっぱに自営していく「おしん」を演じられ、おしんの母ふじに泉ピン子さん、父の作造に伊東四郎さん、加賀屋の隠居くんに役に山岡久乃さん、といった名優と共に熱演だっただけに、苦境にもひるまない「おしん」という人間の生

◆本の紹介◆

米倉勝則 編

『玄海灘のあなたに』

玄海灘のあなたに

玄海灘のあなたに

体一つで引き揚げる迄の屈辱、絶望感と戦争の恐怖は今も思い出す。戦後の不自由な生活でもドン底を見た。愚痴も辛さもなく……。あれから50年、同窓生の米倉氏(昭24・高1回卒)が編者となり当時の想い出を集め、語りつく昭和の新書である。

問い合わせ先

尚鶴書院

荒川区西日暮里三十七ー三三

電話 五六八五ー四六〇七

与えずにはおれなかった。世の中は大きく変わり、暖衣飽食に甘んじがちな昨今、範として仰がねばという思いがしてならなく劇場を後にした。関東鹿児島県人会には初めて参加させてもらったが、県出身者の多士済々な皆さんが、ふるさと鹿児島を想い、郷里の発展のために何かとご尽力されていることを伺い知った。(黒川 浜)